

課題研究ハンドブック Chapter 1 (試作版)

～リサーチ、プレゼン、レポートの枠組み～

このサポートシリーズでは、高校生の皆さんに、課題研究ではどのようにリサーチを進めれば良いのか？ また、調べた結果をプレゼンやレポートにどのようにまとめたら良いのか？ 『基礎演習ハンドブック』（関西学院大学総合政策学部、2012）等を参考に、具体的に説明しましょう。

とは言え、高校生の方々にはリサーチやレポートについて、なかなかイメージがわきにくいかもしれません。また、ひょっとして「こと細かに調べなくても、あるいは小難しく書かなくても、言いたいことは伝わる」等とお考えになるかもしれません。しかし、リサーチやレポートでは好き勝手に調べたり、書いたりして良いわけはありません。それでは、まず、リサーチの心構えから始めます。

リサーチとは何か？ その心構えとしての3つの条件

リサーチやレポートの心構えとして、以下の3条件をあげましょう。

- (1) **学術的（そして社会的）貢献**：リサーチやレポートのテーマは「ほかの人と違うこと＝自分のオリジナル」が望ましいとされています。そして、それが結果的に**新しい情報**を産み出し、学術にも社会にも貢献になれば素晴らしいことです。もちろん、いつも成功するとは限りません。失敗するかもしれません。しかし、ノーベル賞等でしばしば指摘されていますが、**失敗から思わぬ成功が生まれることも珍しくないのです**。そもそも、「試してみなければ」、進歩はありません。ですから**失敗をおそれず、オリジナルで、思わぬ貢献**に結びつくかもしれない**新しいテーマ**にチャレンジして下さい。
- (2) **客観性**の保証：リサーチやレポートでは、事実を積み重ねることで議論を展開しなくてはなりません。自分の主観だけで書きまくってもいけないのです。それでは、どうすれば“客観的”と評価されるのでしょうか？ 大きく分けて、以下の4つの方法があります。
 - ①**数値**（数字）を用いる。もちろん、数字は作り方や見せ方で聞き手や読者に与える印象が異なりますが、それでも数字が持つ客観性は有効です。
 - ②先行研究を**引用**する。人間は万能ではありません。自分の知らない領域のことは素直に、すでに研究をおこなった専門家の意見（**文献・資料**）を参考にすべきです。
 - ③**歴史的事実等と照合**する。なお、“歴史的事実”は自分の解釈次第でどのように使ってもかまいませんが、“歴史解釈”は引用として扱わなくてはならない点に注意しましょう。
 - ④アンケートや取材（インタビュー／ヒアリング）、フィールドワークで**自らリサーチ**する。

このような“客観性”とは、19世紀にイギリス王立協会で「科学とは何か？」を議論する上で中心となった概念です。すなわち、**客観性の維持＝科学**なのです。

- (3) **公共性**の保証：レポートを書く際、不特定多数の人が読むかもしれないことを自覚して下さい。日記やエッセイのように主観的感想ばかりを述べてはいけません。できるだけテーマに対する回答に焦点をあてた文章になるように工夫して下さい。テーマについても、より汎用性・一般性が高い課題が望まれます。ですから、「関西地区の大学生の英語力」よりも、「日本人の英語力」の方が公共性の高いテーマになります。一方で、無断で他者の文章を引用すれば盗作になります。

■課題：それでは、ここで課題です。以下の話題から、皆さんはどんなテーマを思いつきますか？

- (1) アジア各地で“近東”、“中東”、“極東”等と呼ばれている地域があります。では、これらの呼び名は「何処からの目線」なのでしょう？
- (2) インドネシア共和国の公用語であるインドネシア語は、どの民族の言語でしょうか？
- (3) “新大陸(アメリカ大陸)”の発見者は誰か？ 選択肢から一つ選んで下さい(表記は原音主義)。
①コロombo ②ヴェスプッチ ③マガリャンイス ④レイフ ⑤ガマ ⑥その他()

■解説は4頁

リサーチ・レポートの種類とレベル

次に、リサーチやレポートはどんな種類に分かれるのか、研究の進展にそって説明しましょう。なお、この順番に研究としてのレベルが上がっていくものと思って下さい。

レベル1 (論点整理型)：これまでのリサーチの流れを整理しながら、現在の議論をグループ分けします。この作業は発表準備等に必須で、研究の第一歩と言えます。

レベル2 (サーベイ型)：議論を整理して「何が未解決の問題なのか？」を探します(サーベイ)。実はこれだけでなかなか大変です。未解決な問題を3、4つ提示するだけで十分な学術的貢献です。

レベル3 (分析型)：サーベイで浮かび上がった対立する議論の是非を、何らかの基準で比較検討します。自然科学では仮説検証型の論文にあたりますが、経済学等でも証明に統計手法が用いられます。政治学や国際関係論では、歴史的事実に照合して議論することが多いようです。

レベル4 (政策提言型)：分析した結果を具体的な提案に落とし込みます。単純に「～すべきである」だけではだめです。実行体制や実施にあたって予想される問題点等も含め、新提案を目指します。

レベル1からリサーチを進め、レベル3か4にたどり着くべきですが、時間がなければ、レベル2で終わっても仕方ありません。また、レベル1は、そうした道筋の足がかりと考えて下さい。

リサーチ・プレゼンテーション・レポートの構造・形式

さて、リサーチに基づいたレポート/プレゼンテーションは基本的に3つの部分からなります。以下に概略を説明しますが、これは学術論文の形式として標準的なIMRAD(Introduction, Methods, Results and Discussion)の簡易版と思って下さい。

- (1) 序・はじめに (Introduction)：このパートは「テーマ」の説明です。何より肝心なのは、貴方がそのテーマに感じた魅力や重要性を他者に伝えることです。具体的には、
 - ①テーマに関する社会的位置づけ：未解決の問題を提示し、研究の必要性を説明します。
 - ②目的：このレポート(リサーチ)で何を明らかにするのか、明記します。
 - ③仮説：そのテーマについて自分なりの仮説を提示します。
- (2) 調査結果 (Results)：リサーチで調べた結果を記述します。ここでは客観性を心がけて下さい。文献は必ず引用を、データを利用した場合は出典を明記するよう注意して下さい。IMRAD型のレポートでは、Resultsの前に方法や対象を説明するMethodsやSubjects等が入ります。
- (3) 考察・議論 (Discussion)：調査結果を自らの視点で解釈、考察、そして提案します。プレゼンテーションでもレポートでも、このパートこそ一番大切です。グローバル・スタンダードでは、考察・議論がオリジナルで、新たな謎・課題が解き明かされ、さらに新しい仮説を打ち出すリサーチほど、立派な研究と評価されます。ある研究者はこう指摘しています。「重要な発見をしよう

とするよりも、自分の発見を重要なものにするに、努力すべきである」(白上謙一、1972)。自らが発見した事実に、自分も他の人も想像さえしていなかった価値があることに気づき、「この発見はこんなに重要なんだ」とアピールする。これがリサーチの醍醐味です。

- (4) 引用文献・資料(書籍名、著者名、出版年、出版社を明記): レポートの文末には、参考にした文献に関する引用文献・資料をまとめた表をつけねばなりません。

リサーチをおこない、その結果をプレゼン/レポートにまとめるには リサーチ・レポートの構造

そろそろリサーチの構造について話を進めましょう。まず、リサーチの全体像を頭に入れて下さい。もうお気づきでしょうが、リサーチの構造はさきほど紹介したレポート・プレゼンテーションと基本的に同じです。つまり、リサーチの方法を覚えれば、レポートの書き方も体得したことになります。自然科学でも社会科学でも、どんな複雑なリサーチもつまるところ、以下の3つの構造に分かれます。

- (1) 研究テーマは何か? どうしてそのテーマを取り上げるのか? = 「序」として、「問題発見」や、「仮説の提唱」をしなければなりません。そのため、あなたの**主観**が色濃く出るはずですが。
- (2) 調査結果はどうだったか? = 「結果」としてリサーチの結果を述べます。文献調査では一つの問題についての解釈の変遷、学説史等ですが、フィールドワーク等では測定・観察した数値です。このパートはいわば「**客観的事実**」ですから、主観はできるだけ書かないのが基本です。
- (3) 調査結果から、仮説は支持されたのか、否定されたのか? その結果をどう解釈をするか? あるいは、どんな新説・提案を唱えるか? これが「**考察・議論**(ディスカッション)」です。再び、あなたの**主観**が前面に出てきます。

ここで一つだけ付け加えておきます。リサーチの過程で“**失敗**”を感じることもあるかもしれませんが。例えば、**仮説にうまくあわない**。しかし、それは失敗というより、**新たな可能性**を示しているのかもしれません。そこでは、「既存の考え方に無理にあわせて、ごく平凡なレポートにする」より、“失敗”の原因は何か? 少し視点あるいは方法を変えれば、実は誰も気付いていない新発見があるかもしれないのではないかと? あるいは、ひょっとしたら教科書等の方が間違いなのではないかと? 様々な疑問がわきます。自分で単純に“失敗”と決めつけず、先生や専門知識をもった方に相談しながら、今一度全体を振り返って見ましょう。失敗こそ、あなたにとっては前進のきっかけであり、新発見の母かもしれません。

さて、右下の図はビジネス関係の本に掲載されていたマーケティング・リサーチの模式図ですが、基本的な構図は自然科学等でも同じです。この図の「**リサーチ目的の明確化**」こそが、まず皆さんが直面する課題です。例えば、欧米の会社が日本進出の際、「**アメリカでよく売れている商品が、日本の消費者に受け入れられるだろうか?**」、これがリサーチ・テーマだとします。**仮説**を立ててみましょう。

- ①仮説1: 何も変えなくても、売れる
- ②仮説2: デザイン等を多少変えれば売れる。
- ③仮説3: アメリカでの販売戦略と異なる戦略を採用すれば売れる。
- ④仮説4: どうやっても売れない。

(十さらにほかの仮説を考えてみましょう)

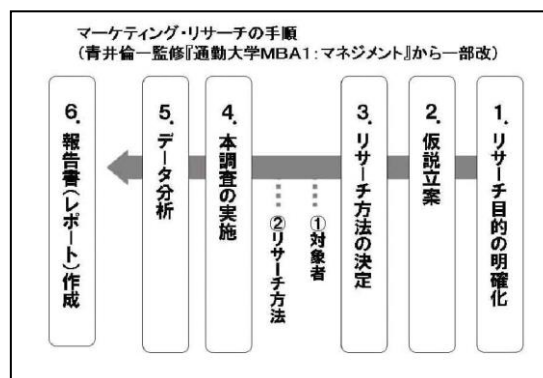


図1. マーケティング・リサーチの手順
(青井、2002、29頁の図を一部改変)

高校生が学ぶ課題研究

こうしてリサーチを進める際、とりあえずたてる仮説を「**作業仮説**」と呼びます。そして、これらの作業仮説にそってリサーチを進めていく、これが仮説検証型のリサーチです。ここでは仮説はあなたの考えを整理し、現実を見つめ直し、そこから真実を知っていくための“道具”なのです。

なお、リサーチはテーマ（目的・仮説）、リサーチ（調査）、そしてディスカッション（考察・提案）と進みますが、そのディスカッションをベースにさらに新しいテーマに進んでいく、という循環的な構造を示します。こうした作業は、実は、会社等での報告書や新ビジネスの企画書、上司への稟議書を作成する場合にも等しく重要です。

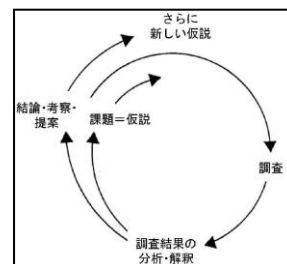


図2. リサーチの循環的構造（マーティン&ベイトソン、1990）

したがって、レポート作成の際には、とくに“序（＝問題提起）”と“結果（＝調査結果という客観的事実）”と“考察（＝ご自分の主観的かもしれない**指摘、主張、提案**）”が一貫したストーリーで貫かれていることに気を配ってください。さらに、“考察”が次のステップに向けて、つまり新しい課題＝仮説を生み出すように工夫することをお願いします。

それでは、次のChapter 2で、具体的なリサーチ・レポートの枠組み作りについて、説明をします。

引用文献

- 青井倫一（2002）『通勤大学 MBA』 総合法令。
関西学院大学総合政策学部編（2012）『基礎演習ハンドブック』 関西学院大学出版会。
マーティン、P. & ベイトソン、P.（1990）『行動研究入門』（粕谷英一他訳） 東海大学出版会。
サイド、EW（1993）『オリエンタリズム』（今沢紀子訳） 平凡社。
白上謙一（1972）『生物学と方法』 河出書房新社。

■課題についての解説

（1）“**近東**”、“**中東**”、“**極東**”等との呼び名は「何処からの目線」か？

もちろん、ヨーロッパ、とくにイギリス外務省あたりからの目線にほかなりません。なお、極東も含め、アジアは一般にオリエントとも呼ばれます。これもヨーロッパから見て東方の地域という意味で、異文化として様々なイメージが付与されています。思想家の E・サイドはこうした一種の西洋中心主義を“オリエンタリズム”と呼び、批判しています（サイド、1993）。

（2）インドネシアの**公用語**であるインドネシア語は、どの民族の言語でしょうか？

インドネシア語とは、スマトラ島のリアウ州に暮らしている人たちが話すマレー語のスマトラ方言をもとにしています。したがって、多民族国家インドネシアにおいては、国民の大半にとって必ずしも母語ではありません（例えば、ジャワ島でもジャワ語やマドゥラ語等に分かれます）。一方で、インドネシア独立に際し、多民族・多文化間でコミュニケーションできる言葉（共通語＝リンガ・フランカ）として、海上交易を通じて広がったマレー語スマトラ方言が公用語に採用されたのです。

（3）“**新大陸（アメリカ大陸）**”を**発見**したのは誰か？

この設問は二つの意味があります。一つは「氏名は、その方が育った民族での呼称に従いましょう（原音主義）」、もう一つは「誰がほんとうに新大陸を発見したのか？」です。まず、氏名ではコロンボ（イタリア語）は日本では一般にコロンブスと、また、マガリャンイス（ポルトガル語）はマゼラン/マジェランと呼ばれていますので、その点、ご注意下さい。次に、「誰が新大陸＝アメリカ大陸を発見したか？」ですが、以下の答えがあります。

- ・人類最初の発見者は⑥で、ネイティブ・アメリカン/ファースト・ネーション等の祖先の誰か。
- ・ヨーロッパ人としての最初の発見者は、ヴァイキングの④レイフ・エリクソン。
- ・大航海時代の幕を開けた大西洋航路の開拓者としては、①コロンボ（コロンブス）。
- ・“新大陸”としての存在を指摘、アピールした者として、②アメリゴ・ヴェスプッチ。

2016年12月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部